

特  
3262  
3

木朝櫻陰比事

卷五

一

揚子被く湯氣深

あつちと湯をきくはあ  
あつちと湯をきくはあ

二

少川五器命重子也

あつちと湯をきくはあ  
あつちと湯をきくはあ

三

白浪乃く脈を

あつちと湯をきくはあ  
あつちと湯をきくはあ

四

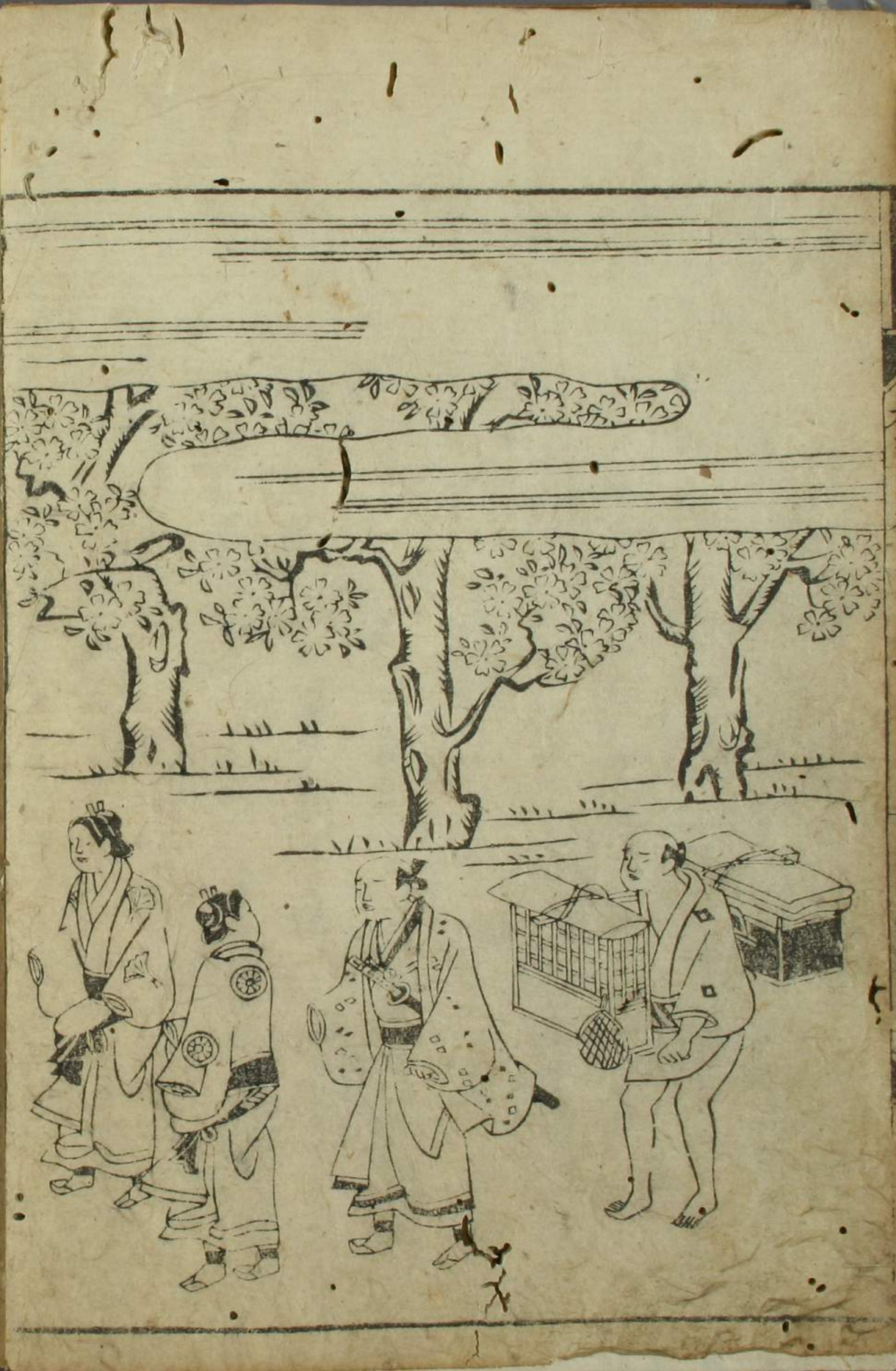
あつちと湯をきくはあ

あつちと湯をきくはあ  
あつちと湯をきくはあ









之を男れく之を女抱か入信め爾まむい集る  
あまなうそ一板らうそくれむういすかしてんん  
何く煙あハ行目女と通ひ女のい家はあゝるま  
人か綿帽子れ下より脱けを家あえく居候  
髪り通と云いんうりぬけより毎妹とてせて候  
うけあり我救年い事にかつてんあもとてん  
こいん是の油ぬけて西目け一室行とて安分別の  
下とむり月と燈して膝ます候と毎年の款す  
一とさるぐんあれ方から人とありけは掛ぬこと  
い方にと幸い事らと懸領ハ罪痛よて咽なれ世間  
とあめをせ動らうそと切して旅言う子へ一あれ  
うれ行月い方かれ咽あぐいにかたうと縁組と

三三女交のさうつと事一と掛しなるは煙又  
男れ福子と後まきそ二款撲り拍て我うに毎年の  
まのあれをゆはなうに世らをとんあせ娘とあす  
乃翁抱と云ゆすに毎年れうにハゆとすい事  
にたりてんが候一時よ仲人か娘の親もを悪  
此後く佛所候と云子細とゆす存けあえんされま  
うとあそくはば義の娘の親乃無ゆりうと免事けり  
乃乃こまかてん女者いんうりあひの信念也  
まひあう人むらうそと妹嫁と又毎年もゆん  
男男子と今ハ娘言つてをせし一と又仲人つ  
まのこの序らうとあそくはば義と云  
よるういんあれ縁組の語言あ中ゆにゆあま





















うちいふ事いふゆりゆと命をわやうにせむる代り  
 何んともなく是とあはれり命ぬ中明の月も代り  
 雲への入る事よ一熟くす事れを主人思案一て是  
 懐もよとあぬ者れいせり幸にあすさつまとも  
 院食後す事よ中比天物好もて山依のおそり  
 のは是と海に乳母は仕組玉奥より海よりひの  
 ていばらまよものをせて振子を落りあせ先うかごと  
 えんせいばらまよのこぬれ者とん海にれそくせめて  
 いふ乃思ひ入すけひげよのぬれ入なりそまをよあ  
 らりて落れれとつを山依落金城をばぬ肉の  
 初よす亦に経一海に東海へそを落れ人こい  
 三年又後く名を志海一まを海せを海のうま















六

元禄二年己酉月吉

江戶自本橋吉物町

新屋徳兵衛

大坂高田橋上六本松筋南入

尾金屋庄在書

板行



